

図書館だより



No. 3

平成 29 年 6 月 23 日発行

体育大会の日のような快晴が恋しい今日この頃ではありますが、しっとりと雨に濡れた木々や花の景色も風情があってよいものです。この季節の花といえば、真っ先に浮かぶのは紫陽花ですが、ハナショウブやアヤマなども見ごろを迎えています。また『ところざわのゆり園』でも、約3万平方メートルの自然林に50種・約45万株のゆりが咲き誇り、森林浴と散策が楽しめるようになっています。外出が億劫になっている人も雨の日だからこそ見られる景色や季節の花を楽しむ景色と出会いにあちこち出かけてみましょう。



先月、又吉直樹さんの新刊『劇場』が発売されました。前回の『火花』が芥川賞を受賞し、大変話題となりましたが、今回の『劇場』も注目を浴びていますね。書店でもピラミッド積みで展示され、広告もよく目にしました。「恋愛がわからないこそ、書きたかった」という又吉さんの切ない恋愛小説、図書館でもイチオシ中です。その他、新着本コーナーに展示中の森絵都さんの人生の大切な瞬間を描いた短編集『出会いなおし』や似鳥鶏さんの美術にまつわる青春ミステリー『彼女の色に届くまで』もおすすりめです。

*不器用すぎる恋の行方

913.6-マ『劇場』 又吉 直樹 || 著 新潮社

東京で小さな劇団「おろか」を旗揚げし、脚本を書きながら暮らす永田。しかし、劇団に対する世間の評価は手厳しく、思うようにはいかない。人との距離感が上手くとれず、気持ちを伝えるのも不器用で、数少ない団員とも衝突してしまう。恋人との関係も相手の優しさに甘えてばかりで、周りからは決してよい関係には見られていない。そんな永田の姿を見ていると、もっと素直になったらいいのに、もっと違う言い方があるはずなのに、もどかしくなりますが、永田の卑屈さにはどこか共感もします。わかってしまうからこそ、モヤモヤとしてしまうのですが、一緒にモヤモヤとしながら、ラストまで永田を見守って読んでください。

*雨の日の夜にはこんな世界がある

748-ア『雨の夜』 麻生 歩波 || 著 ヴィッセン出版

雨の降りしきる夜の景色を撮った写真集。キラキラとした雨粒と、その雨を全身で受け止める虫たちの姿。かたつむりやカマキリ、蜘蛛、色々な虫が登場しますが、幻想的な雰囲気が漂っていて、普段なら「虫は苦手！」と避けてしまう人の目も惹いてしまう不思議な魅力があります。雨に濡れるのを避けたがる私たちとは違って、どのショットを眺めても、虫や植物は全身で雨を喜んで受け止めているように見えます。その姿を見ていると、雨のありがたみを感じます。雨音を聞きながら私たちが眠りについているころの外の世界をみなさんも覗いてみませんか。

🐾 プラバンで作ろう 🐾

今年第二弾の図書館制作コーナーを開設します。昨年のこの時期には、新聞紙でエコバッグ作りを行いました。今回は趣向を変えて、初の企画として「プラバンでブローチづくり」を行います。

開設期間は**6月27日から7月下旬まで**を予定しています。いつものとおり、持ち物は不要です。気軽にやってください。初めての企画なので、うまく出来上がるかドキドキでもありますが、みんなで頑張つて、オリジナルの可愛いブローチを完成させましょう。完成したみなさんの力作を見せてもらうのを楽しみにしていますね。

*プラバンの楽しさにハマったら

751-フ-1 『プラバンアクセサリー』 文化出版局

身近なものを使って気軽に作って遊べるプラバン。「子どものころに遊んだな」と懐かしさを感じる人もいるかと思いますが、その頃とは違った楽しみ方でプラバンに触れてみましょう。

この本を使えば、ブローチ以外にも色々なアクセサリーや小物を作ることができます。素材はプラバンですが、いくつも作って使いたくなる可愛い仕上がりです。

巻末に型紙もついているので自分でデザインを考えるのは難しいな…と思っている人も気軽に作品づくりを楽しんでみてください。

★星に願いをこめて★

図書館では七夕の展示もしています☆

みなさんも星に願い事を書いて図書館に飾りませんか。今年もたくさんの星で図書館の柱を埋めていきましょう。

443-イ『旅先での南天星空ガイド』 飯塚 礼子 || 著 恒星社厚生閣

あなたはいくつの星座を見つけられますか？七夕の頃は天体観測に向かない天候ですが、織姫と彦星が会えるようにと願って、夜空を見上げたりしますよね。織姫はこと座のベガ、彦星はわし座のアルタイルといわれ、天の川を挟んで輝いています。星座も緯度によって見えるものが違います。この辺りでは見られない星座の一つに、南十字があります。2年生が修学旅行で行くニュージーランドでは、国旗に南十字が描かれるくらい親しまれている星座です。ほかにもケンタウルス座やカメレオン座などが南半球でなら観測できます。ぜひこの本を参考に、調べておきませんか。

併せて、

天文入門書として楽しめる『星の王子さまの天文ノート』(440-ア 河出書房新社)
天文部の青春を描いた『夜の光』(913.6-サ 坂木 司 || 著 新潮社)もおススメ!!



日本の誇れる文豪たち～絶賛活躍！現代作家編～

『日本の誇れる文豪』の三人目は西 加奈子さんです。西さんは、イランの首都テヘランで生まれ、エジプトの首都カイロで暮らしたのち、大阪で育ちました。

2004年に『あおい』でデビュー。2013年に『ふくわらい』で第148回直木賞の候補に選ばれ、2015年には『サラバ！』で第152回直木賞を受賞しました。

西さんの作品では、毎度、読者を惹きつける女性が登場します。『さくら』のミキ、『円卓』のこっこ、『まく子』のコズエ、『きりこについて』のきりこ、本の中で出会う彼女たちは、時に危うさで、時に強烈なインパクトで、時に純粋なまっすぐさで、読む人の心を揺さぶってきます。また西さんは絵画においても才能を発揮しており、自著の表紙絵や挿絵を手がけています。今年1月には、最新作『i(アイ)』のラストシーンをモチーフに、その世界観を表現した個展が開催されました。



*第152回直木賞受賞～サラバに込めた僕の想い～

913.6-ニ 『サラバ！ 上下』 西 加奈子 || 著 小学館

僕の家の女は強い。直感で生きる美人な母と生まれた時から何かに怒っている姉。ソリは合わないが、ふたりの個性は家庭内でも外でも爆発していた。それに比べ、僕はと言うと、気配を消すこと、世の中を無難に渡っていく術ばかりをどんと磨いていった。なんてったって、いつも僕の近くには、「自分を見てほしい」と強い気持ちを持って生きる姉がいたのだ。いつだって家族を振り回し、混乱させてきた姉に怯え、時には疎ましいと思いつつ、僕は大人になっていった。しかし、うまくいってはいないはず人生は、驚くほど簡単に転落する。「こんなはずじゃなかった」と気持ちばかりが焦って、どうしたらいいのかがわからない。家族とだけでなく、社会とも、友だちとも、恋人とも、すれ違っていき僕に声をかけてきたのは、なんと、あの姉だった。

*2017本屋大賞ノミネート作品～この世界にアイは存在するのか～

913.6-モ 『i(アイ)』 西 加奈子 || 著 ポプラ社

『この世界にアイは存在しません』入学式を終え、初めて受ける数学の授業で虚数(i)について、先生はそう言った。アイの心には、その言葉が張りついた。アメリカ人と日本人の養父母を持つシリア人のアイ。両親は優しく、アイの気持ちを尊重し、何不自由ない生活を送らせてくれる。高校では、ミナという心からの親友にも出会えた。けれど、アイはいつも自分が「幸せであること」を恥じていた。そして、「幸せであることを恥じる」傲慢さを恥じていた。天災や戦争によって理不尽に命を落とす人たちがいる。どうして自分じゃないのか、どうしてその人たちだったのか。不可抗力であってもアイは苦しい。いつしかアイは1冊のノートを書き始める。ページを埋めていく“ある数字”と、もがいて、もがいて、必死に求める自分の存在意義。アイはその答えを見つけられるのだろうか。

*西加奈子の6年分～エッセイでも魅せてくれます～

914.6-ニ 『まにまに』 西 加奈子 || 著 KADOKAWA

小説を読んでいて感じる西さんの雰囲気とは、また違った西さんに出会えるエッセイ集です。第1章“日々のこと”では「西さん、その気持ちわかるよ！」ということや、「言われてみると、本当にそのとおり！」ということが満載で、絶妙におもしろいです。

第2章“音楽のこと”、第3章“本のこと”では、好きなものに対する熱い思いを存分に感じることができます。表現の仕方がとても上手く、聴いてみたい、読んでみたいという気持ちにさせられますし、こんなに上手く言葉が使えるようになりたいという憧れも感じます。

西さんの小説を読んだことのない人でも楽しめますので、西加奈子という作家に出会うきっかけにしてみてください。ただし、気を抜くと、思わず吹き出してしまいますので、ご注意ください。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

先月の図書館だよりで紹介した森見登美彦さんの『有頂天家族』がとてもおもしろかったので、続編『有頂天家族 二代目の帰朝』(913.6-モ 幻冬舎)を読みました。京都で暮らす狸の一家 下鴨家は『面白きことは、良きことなり!』を合言葉に相変わらずワイワイと賑やかな様子。今回も主人公の三男 矢三郎の身の回りで、狸鍋を食らう天敵「金曜倶楽部」、隙あらば下鴨家の邪魔をする夷川家の兄弟「金閣銀閣」たちが騒動を巻き起こします。「この人たちは、本当にいつでも大騒ぎをしているな」と呆れるし、絶対に自分は巻き込まれたくないけれど、全力で「阿呆」をやっている彼らの姿は楽しそうにも見え、ついつい目が離せません。そして、この本のもう一つの魅力は、あたたかな絆がたくさん描かれているところ。家族の絆、兄弟の絆、師弟の絆、それに加え、今回は兄弟たちの恋の絆にもグンと迫っていきます。じれったかったり、切なかったり、なかなかの恋模様でした。



【今井】

『ヴィヨンの妻』(B913.6-ダ 太宰治 || 著 新潮社)を、読書会の準備として読みました。読書会は6月20日(火)なので、このお便りが発行される時にはもう終わっているはずですが、楽しい会でしたでしょうか。1冊の本をみんなで読み、その感想等を語りあうと、自分だけでは気づけなかった視点や考え方に会えます。それぞれが感じたことに不正解はありません。怖がらずに人と物語を共有し、より深く味わう楽しみを経験してみてください。今回参加できなかった人も、もしこれから機会があるようでしたら、ぜひ読書会に参加してみてください。ちなみに、次回の読書会は9月28日木曜日を予定しています。どの本かはまだ決まっていません。お勧めの本があったら、図書館まで教えに来てください。あなたの好きな本を大勢の人と共有しましょう！さて、『ヴィヨンの妻』は短編集で、読書会で取り上げる「桜桃」の他にも「ヴィヨンの妻」「父」など7編が載っています。太宰の晩年、亡くなるまでの3年間に書かれたものばかりです。どの作品にも駄目だけどなぜか魅力を放つ人物がいて、またそんな彼を包みこむ女性もいたりします。悪魔的な人物の魅力に取り込まれることは恐怖ですが、だからこそ興味はわいてしまいますよね。【鈴木】